

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32508

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00255

研究課題名（和文）被災館支援システムによるミュージアムの情報と空間の関係性と相互作用に関する研究

研究課題名（英文）Research on the relationship and interaction between museum information and space using a disaster museum support system

研究代表者

伏見 清香（Fushimi, Kiyoka）

放送大学・教養学部・教授

研究者番号：30369574

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ミュージアムの解説と投稿をwebで共有する参加型成長連携支援システムを発展させた。スマートフォンを使用し、ミュージアム等をwebで繋ぎ、分野と地域を越えたシステムで、広く深い鑑賞へと導くシステムを改善した。研究成果は、以下にまとめた。日本デザイン学会口頭発表及び『日本デザイン学会EDプレス』（2021）。『情報デザイン特論』（2022）。陸前高田市立博物館でのシンポジウム（2022）。TV番組『情報をデザインする-ミュージアムの役割と可能性-』。日本展示学会口頭発表及び『展示学66』（2023）。TV番組『情報をデザインする-デザインミュージアムへの広がり-』。

研究成果の学術的意義や社会的意義

災害が多発し、新型コロナウイルスの影響下において、美術館や博物館、水族館などのミュージアム全体の連携を考え、シンポジウムを開催し、その成果を反映し、使いやすい参加型の鑑賞支援システムに改善していくことは意義がある。

研究成果の概要（英文）：We have developed a participatory growth collaboration support system that shares museum explanations and posts online. We have improved the system that uses smartphones to connect museums and other institutions online, leading to broader and deeper appreciation through a system that transcends fields and regions. The research results are summarized below. Oral presentation at the Japanese Society for the Science of Design, and "Japanese Society for the Science of Design ED Press" (2021). "Special Topics in Information Design" (2022). Symposium at Rikuzentakata City Museum (2022). TV program "Designing Information - The Role and Potential of Museums". Oral presentation at the Japanese Society for Exhibition Studies, and "Exhibition Studies 66" (2023). TV program "Designing Information - Expanding to Design Museums"

研究分野：デザイン

キーワード：鑑賞支援 ミュージアム 連携 デザイン

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外で災害が多発し、美術館や博物館、都市には甚大な被害が続き、被災館は情報が低下しており、尊い命さえ失われている。筆者も2018年の西日本豪雨で被災し、断腸の思いで廃棄作業に明け暮れ、命の尊さを再認識した。また、デジタル技術の発展により、海外の人々とリアルタイムでのコミュニケーションが容易になると同時に、リアルとバーチャルの世界の境界が曖昧になりつつある。

(2) 2002年からPDAやスマートフォンに代表される携帯情報端末を使用した作品鑑賞支援システムの開発とそのデザインを鑑賞者の視点から行い、美術館や屋外で実証実験を行ってきた。また2010年からは博物館においても実験を開始し、「美術館」、「博物館」、「都市」の連携を実施してきた。

2. 研究の目的

地震や災害によって被災した美術館や博物館、水族館など、ミュージアムの「リアル」な連携による活性化と、デジタル技術を活用した「バーチャル」な連携による支援を目指す。ここでは、分野を越えた「リアル」なミュージアムの連携による活性化の可能性を探ると共に、美術館や博物館が用意した「いのち」をテーマにした展示情報と、現地から参加者が投稿した写真画像やコメントをwebで共有する参加型連携支援システムを発展させ、より使いやすいシステムを実現するCo muse System: Cooperative museum evolution System (<http://comusesystem.com/>)。スマートフォンを使用し、美術館や美術館、都市をwebでつなぎ、分野と地域を越えた参加型連携支援システムで、人間の根源的な「いのち」の営みと歴史について、広く深い鑑賞へと導く支援システムを目指す。

3. 研究の方法

(1) 新たな館との連携: 2021年福井県年縞博物館(6点)の提供と連携開始

(2) シンポジウムの開催: 美術館、博物館、水族館など分野を越えたミュージアムの「リアル」な連携と、デジタル技術を活用した「バーチャル」な連携による活性化を具体的検討するため、2023年2月20日に陸前高田市立博物館でシンポジウムを開催した。

① 第1部: 地域のミュージアムの現状と課題

② 第2部: ディスカッションその1(地域のミュージアムのありようと連携の必要性)

③ 第3部: ディスカッションその2(情報デザインによるミュージアム連携の可能性)

参加者は、以下の7名であった。熊谷賢(陸前高田市立博物館)、真鍋真(国立科学博物館)、前川さおり(遠野市)、古川健(ふくしま海洋科学館)、山内宏泰(リアス・アーク美術館)、蘆本美孝(北九州市立自然史・歴史博物館)、伏見清香(放送大学教授)

4. 研究成果

2021年に連携を開始した福井県年縞博物館は人と人とのつながりを大切に実現した博物館であることが館の展示にも示されている。また、東日本大震災をとコロナ禍を経験し、12年近くの時を経て再オープンを遂げた陸前高田市博物館も、地域の人々との強いつながりがシンポジウムで述べられた。シンポジウムの内容は、『情報をデザインする～ミュージアムの役割と可能性～』BS231chの45分番組として制作し、2023年から2025年の2間で20回の放送が予定されている。第1回は2023年4月30日に放送され、2024年7月13日の放送予定もWebにアップさ

れ、「SNSなど個人が手軽に情報発信できるようになったことで、ミュージアムの役割と可能性が急速に変化している。ミュージアム自身も鑑賞者の意見や他のミュージアムの情報を取り入れ、組み合わせ、デザインすることで展示を更新することができる。その一方で、リアルな展示・鑑賞の意義が再認識されている。番組では2022年秋にリニューアルオープンした陸前高田市立博物館で、これからのミュージアムのありかたを議論していく。」としている(図1)。

情報をデザインする～ミュージアムの役割と可能性～



講師 伏見 清香
(放送大学教授)
真鍋 真
(国立科学博物館副館長)
熊谷 賢
(陸前高田市立博物館主任学芸員)
前川 さおり
(遠野文化研究センター学芸員)
山内 宏泰
(リアス・アーク美術館館長)
古川 健
(アクアマリンふくしま館長)
藪本 美孝
(北九州市立自然史・歴史博物館名誉館員)

放送日時 7/13(土) 18:45 BS231

BSキャンパスex特集

図1. 陸前高田市立博物館におけるシンポジウム

研究報告として、2021年には、日本デザイン学会の環境デザイン部会で口頭発表し、『日本デザイン学会 ED プレイス』第93号(2021)にまとめた。また、「災害・コロナ禍におけるミュージアムの現状と連携を考える」というテーマで、日本展示学会での発表し、学会誌『展示学』第66号(2023)に掲載された。

更に、書籍『情報デザイン特論』の111p-188pで以下の3項目に大別し、それぞれまとめて整理し、解決策を見いだした。

- (1) 参加型成長連携ミュージアム支援システムの課題(10項目)
- (2) 鑑賞者と学芸員とデザイナーのつながりをツールに生かす(9項目)
- (3) デザインの改善(6項目)

しかし、コロナ禍により、各館で実験を実施することができなかつたため、今後の課題である。

加えて、2022年の博物館法の改正により、「他の博物館等と連携すること、及び地域の多様な主体と連携・協力による文化観光その他の活動を図り地域の活力の向上に取り組むこと」などの文言が追加され、本研究は重要なテーマとなってきた。

<引用・参考文献>

- ① Co muse System : <http://comusesystem.com>
- ② <https://bangumi.ouj.ac.jp/v4/bslife/detail/01B02014.html>
- ③ 伏見清香、新たなミュージアムの連携に向けて、日本デザイン学会環境デザイン部会機関誌 ED プレイス、2021
- ④ 伏見清香、災害・コロナ禍におけるミュージアムの現状と連携を考える、展示学、第66号、2023、28-29
- ⑤ 須永剛司、伏見清香、植村朋弘、小早川真衣子、池田拓司、情報デザイン特論、2022、111-188
- ⑥ 博物館法の一部を改正する法律(令和4年法律第24号)
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/kankei_horei/pdf/93697301_01.pdf

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 伏見清香	4. 巻 93
2. 論文標題 新たなミュージアムの連携に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本デザイン学会環境デザイン部会機関誌EDブレイス	6. 最初と最後の頁 12p
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井堰絵里佳、伏見清香、藪本美孝、池本誠也、真鍋真、高田浩二	4. 巻 Vol.55. No.1
2. 論文標題 スマートフォンに表示するピクトグラムにおける「図」の線の太さに注目したデザインー視認性と理解度の調査と実証実験ー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 図学研究	6. 最初と最後の頁 p.21-p.36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 伏見清香
2. 発表標題 災害・コロナ禍におけるミュージアムの現状と連携方法を考える
3. 学会等名 日本展示学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 伏見清香, 茂登山清文, 山崎和彦, 田中佐代子, 須永剛司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 310
3. 書名 情報デザイン	

1. 著者名 須永剛司, 伏見清香, 植村朋弘, 小早川真衣子, 池田拓司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 348
3. 書名 情報デザイン特論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	茂登山 清文 (Motoyama Kiyofumi) (10200346)	名古屋芸術大学・芸術学部・教授 (33913)	
研究分担者	柳沼 良知 (Yaginuma Yoshitomo) (10251464)	放送大学・教養学部・教授 (32508)	
研究分担者	井堰 絵里佳 (Iseki Erika) (20826713)	広島国際学院大学・情報文化学部・講師 (35406)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------